

発行日：2007.11.7

発行人：Matsuo Masayasu



## シンガポールの旅 <9/27~10/6 旅のメモ帳>

千葉市花見川区 小林 敬

### 1. シンガポールってどんな国？

シンガポール共和国。総面積699平方キロメートル（東京23区と同じ広さ）。人口は448万人。中国系人民が75%、マレー系14%、インド系9%、その他2%。東京23区の人口はおよそ800万人と言われているので、人口密度などの観点で比較してみるとわかりやすい。

国語はマレー語、公用語として英語、中国語、マレー語、タミール語。宗教は、仏教、回教、キリスト教、道教、ヒンズー教。（以上外務省の資料からピックアップ）

大雑把に見ると北緯2度東経104度ぐらいだろうか、赤道まであと少しのところである。

### 2. 多人種の共存する国

外務省のデータが示すように多くの人種が混ざり合っている上に、長期滞在者や世界から集まるビジネスマンや旅人がひしめき合う。繁華街である Orchard road を歩いているとそのことが生々しく伝わってくる。不思議な雰囲気を持つ国である。

色々な肌の色や色々な顔つきをした人が往来しているので、何の遠慮もなく自分がその中に気軽に溶け込めるように感じられるのが心地良い。

また、他人種の融合と共存の賜物は何といても食文化にある。中国料理、インドネシア料理、インド料理、アラブの料理、マレーシア料理、そして融合の産物であるシンガポールリョウリ。食に興味のある旅人には垂涎の街である。

### 3. 英語の勉強に最適

公用語の中心に英語があり、主要な場所では英語で通じるが、China town、Little India Arab street などの一部では英語がまったく通じないことがあった。

しかし、色々な国の訛りや表現が混ざった不思議な英語の中では、日本人のブローケン・イングリッシュでもまったく恥ずかしく感じないで喋っていける。勇気を持って喋り始めてしまえば、英会話の学習には最適な場所のように感じた。

シンガポールの独特のアクセントと発音の英語は「Singlish（シングリンッシュ）」と言われているらしい。

### 4. 乗り物の中では飲食不可

空腹で騒ぎ立てる孫にタクシーの中でパックの牛乳を飲ませたら、運転手が不快そうな顔を見せた。カーブの弾みに牛乳パックからストローが外れ、牛乳が一滴運転手さんの頬に。

「シンガポールのタクシーは飲食禁止になっている。これは法律で定められている！！」

平身低頭してその場をしのいだが、下車する時に雑巾とペットボトルの水を渡された。

「座席に付いている牛乳の数滴の汚れをきれいに拭いて欲しい」という。

郷に入れば郷に従えの教えどおり、運転手の指示に従った。でも、「クリーニング代をよこせ」というような対応にはならなかったところが、この国のタクシーのレベルの高さかもしれない。確かに、後日乗った電車の中でもペットボトルの液体すら飲んでる人はいなかった。

### 5. ゴミを捨てると逮捕される？

日本では、「シンガポールはきれいな町だ。路上にゴミを落とすと逮捕される」というような情報がまことしやかに語られている。確かにきれいな町である。放置ゴミは少ないが、皆無ではない。歩行中喫煙している人もいないわけではないが、非常に少ないのは事実である。その反面、繁華街の路傍にテーブルが並んでいて、軽食ができるよう



になっているところはかなりある。そのそばにはピン・カン・燃えるゴミのように色違いにした分別ゴミ箱が数個並んでいた。大雑把に見ればきれいな感じがしたが、ゴミを落として逮捕されている場面は見なかった。

(ゴミ箱の表示が Recycle bin となっていた)

## 6. 安くて便利なMRT

Mass Rapid Transit (略称:MRT) という乗り物がある。都心部の地下を走り抜ける地下鉄で、一部の路線は郊外へ出ると地上の高架を走る。

シンガポール島の南部を東西に横切る East west Line は、Changi International Airport と市街地を結ぶ交通機関にもなっている。

North east Line は北東部の Pungol と Harbour front を結ぶ。

そして North south Line は、のほぼ中央部を大きく弧を描いて走り、Marina bay から北に上がりマレーシア国境付近まで行き、西に弧を描きながら Jurong east まで。

中心部の Orchard あたりから一番遠い駅まで乗っても \$1.50 程度で、料金の安さには驚く。乗車券は GTM (General ticketing machine) と呼ばれる自動販売機で購入する。日本の乗車券と異なるのは、「必ず \$1.00 のデポジットを取られる」こと。つまり、\$1.20 のチケットを買うには \$2.20 が必要で、デポジットの返還はこの GTM でもできる。



< Orchard 駅 >



< Woodland 駅 >



< 車内の路線図 >

駅のコンコースは広く、明るく、また表示もわかりやすい。特に乗換駅のコンコースの広さとわかりやすさは、我々旅人にも大変使いやすい。地下駅のプラットフォームにはドアが設置されており、安全が確保されているためか駅員の姿がどこにも見えない。駅名の表示は英語・中国語・タミール語が併記されている。社内はきれいだし、乗客のマナーもよく、どこかの国のように大股開いて座っている人は見当たらない。ドアのガラスに「手で触れて汚さないように」と書かれており、事実手垢が付いていないのが面白い。社内の広告はほとんどなく路線図と次の停車駅を示す電光表示も見やすい上に、アナウンスの声が明晰で聞き取りやすい。この車両は日本製で、走行中の振動や騒音も少なく快適な乗り心地だった。

MRT が地上 (高架) を走る区間は様々な景色が楽しめる。North south Line で島の北部を走ってみたが、巨大な住宅団地があったり、林があったり入江があったりで町中では見られないもうひとつのシンガポールを楽しむことができた。

## 7. 食べるのは楽しい

いろいろなところに Hawker と言われる屋台食堂街のようなものがある。各地から来る Hawker (行商人) が集まるところにできたのだろうか。China town、Little india、Arab street などではそれぞれの国の味が楽しめるし、マレーシア料理やインドネシア料理もそして、それらが融合したシンガポールの料理もあり、食べることに興味がある人にはたまらない街である。大きなマンション団地のようなところの中央部の広場がテントを張った大規模な食堂街になっていたり、日本にはない風景だ。

夕方になると三々五々人が集まり始め、にぎやかな夕食風景が広がる。

China town の Hawker でビールを飲もうと思ったらビールを売っていなかった。

## 8. あーなるとこーなる話

街中のシンガポール川に面したルームチャージ \$240 程度のホテルに泊まったが、トイレは洗浄機能が付いていなかった。日頃温水洗浄に馴れきっている、我が軟弱な廃棄物排出口は二日目に悲鳴を上げ始めた。

窮余の一策として、トイレトーパーを水で濡らしてから使用することにしたら、力も要

らずにきれいにできるので、不快感は解消した。

かみさんはもっと賢いアイデアを使っていたので、途中からお世話になることにした。化粧品か何かの「先細のノズルが付いているプラスチックの小さなボトル」を持参し、個室へ入る時にぬるま湯を満タンにしておく。そして、手動式で……。

日本では、ビジネスホテルクラスでも今やかなりの装備率となっているが、シンガポールではまだまだのようだ。四日目から泊まったルームチャージ\$170程度のホテルも同じだった。いくらぐらい奮発すればこの設備にありつけるんだろうか、今後の研究課題である。

## 9 . 携帯電話天国

繁華街のショッピングモールには必ず携帯電話ショップがあり、いつも混雑している。店の広さは、東京の携帯電話ショップのようなせせこましいものではなく、NTTのショールームぐらいある。今や携帯電話ブームのようである。

歩きながら電話をしている人が多いのに驚いていたら、MRTの中で電話をしている人が沢山いた。右から英語の電話、左から中国語の電話、前からタミール語の電話、なんていう場面もあった。聞いていても意味がわからない言語だと、うるさく感じないことに気がついた。確かに、MRTの中には「携帯電話に関する注意事項」は何も書いてなかった。

## 10 . 植物園の朝

早朝の植物園(Botanic garden)は面白い。そこかしこの広場を使って太極拳をしている。数人のグループから数十人のグループまで様々。

中国人が多いように感じたが、白人もかなりいた。眺めていたら、その横をジョギングする夫婦やウォーキングする老夫婦が通り抜け、さらに「ベビーカーを押す朝の散歩と思われる親子などなど、楽しい雰囲気が漂う。

植物園は入場無料だが、中にある National Orchid garden は有料だった。広大な敷地に様々な植物と様々な景色が詰まっており、くまなく歩こうとするとかなりの運動量になる。

突然、前を歩いている大柄なおじさんのTシャツに目を奪われた。「馬に乗った人が長いものを振りかざしている姿」がプリントされているおなじみのブランド。男が急に立ち止まったので距離が迫り、Tシャツが目前に。よく見たら「B O L O」と書いてあった。



## 11 . 帽子をかぶった女の子……

シンガポール川に沿った Clarke quay のホテルに泊まったとき、朝あまり暑くならないうちに海辺まで歩いてみようということになった。

兩岸のいたるところに野外のレストランが並び、各国の食べ物が楽しめる。

左岸には、シンガポールの歴史を物語る数々の建造物や像などがあり、さながら Heritage court の感が強い。右岸は二階建て程度の高さの古いカラフルな建物の後ろに巨大なしかも色々な形をした高層ビルが覆いかぶさり、そのミスマッチがミスマッチでなく美しく感じるのが面白い。



河口の先端にかの有名な「MerLion 像」があり、観光客がひしめき合っている。帽子をかぶって薄めの長袖のシャツを羽織っている女性の一群は日本人のツアー客だとすぐにわかる。旅行雑誌などに書いてある「陽射しが強いので帽子は必須」というコメントに忠実に従っているせいだと考えられる。他の国の人やシンガポールの人たちは帽子をかぶってはいない。海辺の湿気のせいか、薄い水蒸気の膜に覆われているので、赤道に近い30数度の気温でも刺すような陽射しではないようだ。

この翌日から気をつけてみていたら、どこへ行っても「帽子をかぶった女性の一群」は日本人だった。ついでだが、団体で騒がしい動きをするのは韓国人の中高年。うるさく喋りまくるのは中国人という印象だった。

帰り道で川に面した野外の Riverside restaurant で昼食をとった。美味しかった。

## 12. ホテルでのご挨拶

アメリカへ出張した時、朝晩ホテルですれ違う人に「Good morning」とか「Good day」と声をかけられて気持ちがよかったのを思い出したので、シンガポールでは徹してやってみた。ホテルに限らず、Botanic garden の朝の散歩の時に。

毎朝昼晩気が付いたら声をかけるようにしていたら、不思議なことがわかってきた。

人種により反応に違いがあるように感じてきた。白人はほぼ100%の人がにこやかに応答を返してくるか、もしくは自分から声をかけてくる。ところが、黄色系（韓国、中国、日本）の人はあまり反応してこない。こちらがベビーカーの孫を同行していると、同じ状況の場合だと（ベビー同行と言う共通項があるせいかな）中国や韓国の人も反応する。

これらの現象は、宗教や生活習慣などに起因するものなのだろうか。

すれ違いざまの挨拶や「Thank you」、「Excuse me」、「Sorry」などが気軽に出てくる生活習慣は悪くないと思う。アメリカナイズや猿真似するわけではないが、見習いたい習慣のひとつだと思う。

## 13. セントーサ島へ渡る

シンガポール島の南にある Sentosa Island は主要な観光スポットになっている。

ロープウェイで、電車で、バスで、歩いて、など様々な行き方があるようだが、新しく一月に開通した Sentosa express というモノレールを使ってみることにした。

ホテルのある Orchard から MRT の North south line に乗り、Dhoby ghaut で North east line に乗り換え、終点の Harbour front へ。ここから Sentosa express というモノレールに乗り換え、わずかな時間で島に到着。島の中には色々なルートのシャトルバスが走っており、我々は Under water world という水族館を目指した。Sentosa express の乗車券は、島の入島料金という位置付けになっており、\$3.00 を払って島に入ると、シャトルバスは無料になっている。

Under water world は勿論有料、日本でも近頃流行っている「楽しめる水族館」で、大人も子どもも充分楽しむことができた。

## 14. リトルインディア

MRT の Little india 駅は素晴らしい駅だ。プラットホーム、コンコースなどの随所に「インド」を感じさせるものがある。床や壁に、インドをイメージするものや動物のイラストが描かれており、歩いていても楽しい。

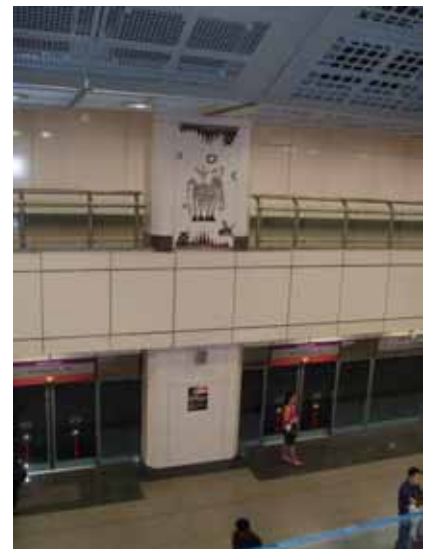
地上に出るとさらに「インド」を感じさせる景色が並ぶ。野菜を売っているマーケットは面白い。トウガラシが山のように積んであったり、ちょっと短めのニガウリ、色の薄めのナス、やけに長いオクラなどなど、日本でもなじみの野菜が姿かたちを変えてや並んでいる。色々な野菜が並ぶ一角、ダンボールに無造作にマジックインキで書いた一文が面白い。

「どれでも合わせて 1 Kg XX ドル。」

遠くに寺院が見えたり、まさに Little india。



Food market



Little india

## 15. アラブストリート

Little india から歩いても行けるぐらいの場所に Arab street がある。

いくつかのモスクとそれを取り巻く独特な色合いの建物の並び。Arab そのものと言うよりもどこことなくいくつかの物が融合した雰囲気がある。

一軒のお店に入り奥座敷のようなところで軽食の後、しばし休養の時間をとった。外は晴れ渡り35度近くあろうかという暑さ。店内のBGMが奏でる曲は、いかにもArabという

曲ばかりで、やがて絨毯の上で横になり、うつらうつら。



再び街を歩いてみるが、やはり涼しいお店の中に入る時間が多くなってきた。布や飾り物、籐の籠などを売っている店を覗くと楽しい。

「1枚\$10の布を5枚買うから安くしてくれ」と言うと、奥から女主（あるじ）が出てきた。「\$46ならOK、それ以上はだめだ」レジで金を払いながら、「三枚は私の分だが、残り二枚は娘の分なので手提げ袋をもうひとつ」と言うと、「この袋は\$2もする、だから一枚しかあげられない」という。しぶしぶ了解して店を出た。

## 16. 出国（チャンギ国際空港）

旅立ってから10日目の早朝2:45起床。チェックアウトを済ませて3:30前にホテルを出発し、タクシーでChangi International Airportへ。タクシーの窓から見ると眠らない街角がいくつかあり、楽しげにうごめく人影が多数うかがえた。

Northwestのチェックインカウンターで、行列の末尾に付いた。やがて順番が回ってくると、「日本人か？」と聞く。「そうだ」と答えると、「日本語のわかる人をアサインするから・・・」と言って奥のカウンターへ案内してくれた。親切な対応に喜んだのは勿論のこと。

ところがドッコイ、かなりクセと訛りのある片言の日本語で、何度か聞き返さないとわからない場面も。我が娘曰く「英語でゆっくり喋ってもらった方がわかりやすかったかな？」とは言え、これもHospitality精神のひとつなのかも・・・と納得した。

NW006便は6:00出発、シンガポールの6:00はまだ暗く、窓から見えるのは夜景だった。

## 17. そして帰国後

シンガポールでは、他国（よそ）から来た旅人にもとても親切で、困っていると声をかけてくれる場面が何回もあった。これはまねして実践すべきことだなと痛感し、帰国後様々な場面で困っている人に声をかけたり、手を差し伸べたりするように心がけ始めた。

外国人の旅人が地図を片手に困っている様子はかなり見受けられるし、日本人でもお年寄りが自動販売機の前で躊躇している場面はかなり見受けられる。

もっと気がついて気軽に声をかける習慣をもつ必要があると感じている。

先日、地下鉄有楽町駅の地下道で地図を片手に持ち地下道の案内図の前で困っている白人の夫婦と思しき二人連れを見つけて声をかけた。

「May I help you? Where are you going to?」

すると二人連れのうちの女性が、「テイコクホテルワ ナンバンノデグチデスカ?」

(2007.10.25) 以上